

真宗の学びほども

名和 達宣

人間といふものは、自分でも何をしてかすか分からない、自分とは何物だか、それもてんで知りやしない、人間はせつないものだ、然し、ともかく生きようとする、何とか手探りででも何かましな物を探し縫^{すが}りついて生きようといふ、せっぱつまれば全く何をやらかすか、自分ながらたよりない。疑りもする、信じもする、信じようとし思ひこもうとし、体当たり、遁走^{とんそう}、まったく悪戦苦闘である。こんなにして、なぜ生きるんだ。文学とか哲学とか宗教とか、諸々の思想といふものがそこから生まれて育ってきたのだ。それはすべて生きるためのものなのだ。

(坂口安吾『教祖の文学』、1947年)

はじめに——「真宗学」あるいは「教学」「学び」をめぐるアンソロジー

A 私は、真宗学徒とは、真宗的信仰の問題を単に自己の精神の奥深くに仕舞い込むことができず、また体験の宗教として個人の意識の裡^{うち}に解消してしまうことに満足せず、個と同時に全体に対する責任の問題として信仰を考える者のことであると思う。だから私は一人の真宗学徒として、自己の到達したところを知性の及ぶ限り公開することを望むし、また同時にそれぞれの人々の思想と信仰に触れることによって、お互いに共有できるものを探り出したり、他から批判されたりすることを願う。何故ならばそれは、自己が本来の自己へ回帰して行くための不可欠の道程だと確信するからである。

(安富信哉「真宗学再考」、『聞——私の真宗学』文栄堂)

B そして泉の純粹さを守るために、特別な祭服をまとい、仲間内でしか通用しない特別な言葉を話す、特別な階級の人たちが、さまざまな規則を定めた。

(トム・ハーパー作、中村吉基訳『いのちの水』、新教出版社)

C ラドクリフで実にたくさんのかたのことを私は学びました。しかし同時に、大学を離れてから、それらの多くを unlearn しなければなりませんでした。

(鶴見俊輔『かくれ佛教』ダイヤモンド社)

I 出遇い——自分よりも自分に近い人

D 西田先生の『思索と体験』を読んだことが、結局私の一生の方向を決定することになった。……後半にある随想的ないろいろの文章には、深く心を打たれた。……あたかもそれらが私自身の魂の内面から出たものであるかのような感じを受けた。〔中略〕

誰でも本当に自己自身であることはそう容易に出来ることではなく、それが出来ない間は、他の人が自分自身よりも自分に近いということはある。若い時にそういう、自分自身よりも自分に近いような人に出会い得るということは、人生における最も大きな恵みであり幸福である。そのことによって、現実の自分をずっと抜け出た一層高い自己の影像が、外の鏡のうちに映し出されて自覚される。
(西谷啓治『西田幾多郎——その人と思想』筑摩書房)

E 「宗祖」という言葉は、単に一宗派の開祖という意味ではない。世界的規模で政治、経済、宗教等、あらゆる分野で人間であることの根拠が問われている現代にあって、その根拠〔宗〕を私たちに先立って顕らかにされた方〔祖〕という意味で、「宗祖としての親鸞聖人に会う」とは、宗派をこえた問いである。

(「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌基本計画「最終報告」」、『真宗』2003年2月)

II 念仏——南無阿弥陀仏と私

F 自分の存在に感動する そこに南無阿弥陀仏がある

(安田理深)

G 他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。まことに、このことわりにまよえらんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきなり。

(『歎異抄』第12章、『真宗聖典』631頁)

H しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。称名はすなわちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなわちこれ念仏なり。念仏はすなわちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなわちこれ正念なりと、知るべしと。
(『教行信証』「行巻」、『真宗聖典』161頁)

Ⅲ 信心——本願力回向の大信心海

I 疑は力也 清（清沢）先生曰く 信ずるは力也 而も信独り力たるのみならず 疑も亦力也 信の力は所信の人をして真に力あらしむ 疑の人は能疑の人をして真に力あらしむ

（曾我量深の1909年思索ノート、『浄土仏教の思想』第15巻、講談社）

J 誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。
（『教行信証』「信巻」、『真宗聖典』251頁）

K 名号不思議の海水は 逆謗の屍骸もとどまらず

衆悪の万川帰しぬれば 功德のうしおに一味なり

（「高僧和讃〔曇鸞讃〕」、『真宗聖典』493頁）

Ⅳ 真宗の救いとは

斜陽一面、欄外の碧桐を透して、明窓浄几の間に及ぶ処、楼上前面の障子を明け放ち、新晴の佳光に酔うて、洞の兄弟、団欒して相話す。檐前の群雀、また瓦棟の間を往来して、頻りに嘖々の声を送る。此の日先生、珍しくも階下の旧居を離れ、楼上来たりて団欒の群に入る。洞の兄弟、先生の四周に在りて、各言わんと欲する所を言う。〔中略〕余、卒爾として先生に謂いて曰く、生、今日『日本新聞』を閲するに、中に『病床日記』とて、根岸の俳人子規子の病中の感を記せるものあり。子は久しく病床に在りて、しかも従容として吟哦を事とす、其の言辞、多く肺肝より出づ。生、今日読む所のもの、頗る興味多し。曰く、「余は従来、宗教上の悟りなるものを誤り居たり。昔は則ち以為らく、如何なる時に於いても、平気に死することを得る、是れ則ち悟道の真意なりと。されど、今にして昨日の非なるを知る。如何なる困難の苦境にも、平気に活くことを知る、是れ則ち悟道の真意なり」と、先生以て如何となす。先生、莞爾として掌を撫して曰く、この語あるかな、この語あるかな、真に是れ悟道絃上の響きなりと。
（安藤州一『清沢先生 信仰坐談』1904年）

※「竿笏の海底から浮かび出たような気持ちであった」（安藤）、「立脚地」とは如何？

L （清沢は）他人に対して寛容の態度を失わなかった。人間が弱い者であることを認めていたので、外から一つかみには非難しなかった。（吉田賢龍の追憶）

M 人間はみな弱いのだ。その弱さを自分の中にも認めない者はいつかやはり知らず
に他人を裁いてしまうだろう。 (遠藤周作『聖書のなかの女性たち』、1960年)

N 「汝是凡夫心想羸劣^{によぜほんぶしんそういれつ}」^{のたま}と言えり、すなわちこれ悪人往生の機^{あらわ}たることを彰^{あらわ}すなり。
(『教行信証』「化身土巻」、332頁)

O しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆
禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を
証す、普賢の徳に遵うなり。知るべし、と。
(『教行信証』「行巻」、『真宗聖典』192頁)

※ 真宗の救い (英訳) は、**salvation or liberation** ?